

〈論文〉

大江健三郎『懐かしい年への手紙』論

—— ポール・リクール「物語的自己同一性」を手がかりとして ——

荒木奈美

はじめに

「主体は、彼が自分について自分に語る物語において自己認識する」(Ricoeur, P. 1985, P. 453頁)

人は語られることによって初めて自分自身が何者であるかを知る、というアイデンティティのあり方を、ポール・リクールは「物語的自己同一性」という言葉を通して明らかにした。人の人生は一つの歴史である。歴史が、語られることによって初めて一つの意味をもって私たちの前に見えてくるものであるのと同じように、人の人生も、語られることによって初めて自分以外の人々の前に見えてくる。歴史が、どこを切り取りどのようなようにつなげて語るかによつては、まったく違ったものとして見えてくるのと同じように、人の人生も、何をどう語るかによつて、それはまったく違ったものとして人々の前にさらされる。その意味で「語る」という行為は、別の語られなかった数限りない可能性を捨象することでもある。語られることによって見えてきた「物語」の裏側には、それ以外の無数の「物語」が内包されているということである。

大江健三郎『懐かしい年への手紙』ⁱⁱⁱは、故郷の森を離れ東京で作家となった「僕」が、家族や故郷の人々に助けられながらさまざまな局面に直面し、そのつど彼の生きるべき方途を模索し続ける半生を描いた長篇小説である。ここには作者である大江健三郎の人となりや、彼の小説を読んできた読者ならばまず、この語り手である「僕」を作者自身に重ねてしまうような、彼自身の伝記的事実がちりばめられている。少年時代の数々のエピソードや、頭に障害を持った息子の存在、若くして作家となったことにまつわる苦難など、大江を知る人にとっては周知の事実ともいえる出来事が描かれていること、さらには物語内で「僕」が発表したとされる小説が、ことごとく大江自身がすでに著している小説を思わせる内容である点などから、読者は容易にこの「僕」を大江自身と重ねて読むことが可能となっている。しかしながら実際には「僕」の「人生の師匠」としてストーリーに重要な役割を果たす「ギー兄さん」が架空の人物であることをはじめ、作品から読み取ることのできる大江の伝記的事実は、この中で巧みにずらされている。この観点から、本稿では『懐かしい年への手紙』は、作者自身の史実を素材としつつも、あくまでもフィクションとして構築されている、書き手としてこの物語を語る人物が、物

語の中で語られている「僕」を自己批評する「メタフィクション」^{iv}として語られている物語と考えている。

メタフィクションとして語られた物語を通して、書き手が語られている「僕」を批評するというスタイルは、大江作品としてはすでに「おなじみ」のものであると言えるだろうが、この作品が特徴的なのは、ギー兄さんという、「僕」に近い存在として登場する架空の人物によって、物語の中でも語られる「僕」への批評行為がなされているということである。ギー兄さんは「僕」の5歳年長の立場から「僕」の生きるモデルとなっているような人物であり、「僕」はこのギー兄さんに追従するようにして生きてきたという設定になっている。その意味ではこのギー兄さんも「僕」の延長上にある人物と考えられる。となればすなわち『懐かしい年への手紙』は、語る「僕」とテクスト内の人物の双方から、二重に自己批評されたメタフィクションという見方も可能となるだろう。

ところでこの物語には、ギー兄さんが「僕」に彼の書いている草稿段階の小説について言及し、〈Kちゃんが「自己の再生と回復の物語」を書くにはまだ「時が熟していない」と言わせている場面がある。「頭部に障害を持った息子」との共生というテーマに悩んでいた「僕」が書き溜めていたものをギー兄さんが発見して批評すると、「僕」はギー兄さんの見解に全面的に納得し、その場で原稿を焼き捨てるというシーンである。「僕」は確かにこの段階で、生きてきた過程において常に「根拠のない負い目」を感じ、「内面の描き方に迷」っている段階にあった。そして実際にこの「物語」は、物語言説上では書かれないまま終わっている。この物語の書き手は、この事実をどのように受け止め、そしてどのように批評しているのか。

本稿の目的は、メタフィクションによって自己批評するこの〈書き手の意図〉を、物語の中から探ることである。この描写において、書き手は「僕」の何を批評しているのか。これを物語内で語られているギー兄さんの生き方との対比から考察してみたい。

1 「僕」の生き方

(1) 常に「後悔」し、受け身で生きつづける「僕」

ギー兄さんは「僕」が故郷に戻らなかった「代わり」として、「森林組合の書記」の役に就き、その生涯を森を拠点として暮らした人物である。そのほとんどは「僕」と離れて暮らしているが、タイミングよく「僕」の人生の節目に関わり、精神的な手助けをしてくれる役割を果たしている。ギー兄さんは、物語の中で「僕」について次のように批評する。

Kちゃんが小説を書いてジャーナリズムに載って以来、アサちゃんはその有頂天ぶりをいうけれど、自分のところに来る手紙は、たいてい後悔の感情にまみれている。小説を書く野心に攪乱されて、外国語の勉強が中途半端になってしまった。将来あらためて学問をやるとして、そのための準備期だったのに、と嘆いてくる。そうかと思えば、これまでに発表した作品はみな中途半端で、いちいちやりなおすべきだったという。その点については、自分が書いて送った批判にも責任はあろうけれどもさ。Kちゃんはこのように際限なく悔いながら、しかも決定的な進路転換はせずに、将来も生きて行くのじゃないか？（中略）つまりはこの世のありとあらゆることについて、受け身で生きている。自分で発心してやりはじめたことにしてからが、すぐにも受け身で悔いはじめる。それがKちゃんの・また自分のありようじゃないか？（320頁）（傍線荒木 以下同様）

引用に見る通り「僕」は、傍から見ると順風満帆に見えるときでも常に「後悔」し、否定的な感情に見舞われるという。そしてその現状を自分から変えようとすることはせず「受け身で生きている」、いわばマイナス志向で他力本願な性質であることを指摘している。

物語言説上では、その後「僕」は、右翼少年の屈折した姿を描いた「セプンティーン」を発表したことで、作家生命が危ぶまれるほどのスキャンダルに見舞われ、たちまち世間の悪意にさらされる。そして逃げるようにして久しぶりに戻った故郷の一室で、「僕」は幼少

からの習慣でもあったという「退行現象にとりつかれ」、思考停止状態に陥る。

毎日、郵便物を門の脇まで取りに出るたびに、一通か二通かはまじっていた厭がらせの手紙。深夜にかかって来る罵声か無言の電話。新聞や文芸雑誌のコラムの揶揄。僕と妻との感じとり方としては、そうしたものに日夜包囲されているようだった東京での暮らしでは、むしろそれらへの攻撃的な反応が自分のうちに湧き起った。若さと無経験による強気ということもあり、時にはかえって以前より気力充実するふうですらあったのだ。それが森のなかの谷間に戻ってみると、その種の外圧から切り離されただけ、内部に押しあがる圧力も弱まってくる。そこでペコンと窪んでしまった胸のうちに、大きい後悔と恥の思いがとどこおって、ほかのことを考えようとしてもすぐそこへ立ち戻ってしまうのだ。いったん思いきるようにしたはずの課題のなかへ、幾度も幾度も、息をとめて潜水するように入りなおさずにはいられない。(346頁)

先のギー兄さんの批評をふまえてこの「僕」の行動を振り返ってみると、確かに「僕」は困難に見舞われたときに自分で「能動的に」乗り越えるような行動力を備えていない。東京で「湧き起った」「攻撃的な反応」も、あくまでも売られたケンカには買うといった条件反射的な行動である。だからこそ、敵の攻撃から逃れた途端に自分ではまったく動けなくなり、「課題のなか」で「潜水」しつづけるという行動しか考えられないのである。

さらにこの危機的な状況を何とか乗り越えたその2年後に、今度は「頭部に異常を持った赤んぼう」のことで苦しむ日々が訪れる。

赤んぼうを乗せた救急車に同乗して板橋区の大学病院にむかう間、やはり二十代なかばの青年でもあった僕は、わずかながら甘やかな味もする涙を流しつづけたものだ。あかんぼうはその日のうちにも死ぬと思いこんでいたから。しかし時が経つにつれて、赤んぼうの手術という課題が、およそ甘やかではない重みをともなう僕にかぶさって来た。大学病院からの手術の申し出があったとしても、―せいぜい「植物人間」なのだから、拒否するように、とはじめの病院で耳うちされた言葉がよみがえり、いつまでも

邪悪なコダマを響かせていた。(366頁)

しかしそのうち僕には変化がきざまれた。赤い瘤をつけて勢いをこめて生きようとしている赤んぼうに対して、積極的に一歩踏み出して、自分としての認知を行わねばならないと、その思いに押し出されて行つたのだ。僕は大学病院に手術を申し出た。赤んぼうは瘤の重みから自由になり、はつきりと生命への過程を辿りはじめることになった。(367頁)

「その日のうちに死ぬと思いこんでいた」「赤んぼう」が、頭に「攻撃的なほどにも生命力にみちた」「瘤」をもって成長し続け、やがて「手術が成功」して生かされることになり、今度は「障害をもった」この「赤んぼう」とどう折り合いをつけて生きて行くかという「共生」の問題が浮上するのである。

最初はあれやこれやと相変わらず「遺恨の感情」(368頁)をもって否定的な思いにとらわれていた「僕」であったが、周囲の積極的な働きにも助けられ、その後「僕」は、かつてギー兄さんから指摘された「受け身」ではない仕方、一つの行動に出る。それは小説を通して息子との共生の問題を描くという働きかけであった。最初に「畸形の赤んぼうを闇にほうむった若い父親」が主人公の『空の怪物アグイー』、そして「異常のある誕生をした赤んぼうから逃れようと画策しながら、しかしついにはかれを引き受け・共生していく決意をする青年」を主人公とした『個人的な体験』を書くという行動であった。

物語の中では、『個人的な体験』発刊後すぐに出された三島由紀夫をはじめとする同時代評の、安易なハッピーエンドであるという批判を免れるための方法がギー兄さんによって示されたうえで、「僕」自身の気持ちいだんだんと穏やかなほうへ向かっていることが描かれる。その上で「自分にとっての根拠地は、この息子と妻との東京での家庭だ、という思いが強く湧いた」と描写されている。この点からすれば、すでに「僕」は確信を持って家族を引き受けて生きる覚悟ができ、実際にそのように行動するようになったという既述のようにも見えるが、実際はその後言葉にならない思いに何度もとらわれながら、物語上の現在に至るまで、その気持ちはわだかまり続けていることが明らかとなる。

(2) 「自己の死と再生の物語」を書く「時」はまだ「熟して」いない

ギー兄さんがある「事件」によって服役後、はじめて「僕」の家に訪れる。そこでたまたま目にした「実際の家族をめぐる」「私という一人称で」書かれた小説について、次のように批評する。

このようにしてきみは、四十歳を越えた自分の、私はこのように生きて来た・生きていくという物語を書いているんだね。いつかきみが講演で引用していた、漱石の悲惨な主人公の台詞どおりに、「記憶して下さい。わたくしは斯んな風にして生きて来たのです」と訴えかけているわけだ。しかしそれをやるについては、小説を書く人間として、よくよく覚悟をかためてでなければならぬのじゃないか？ Kちゃんよ、きみはその覚悟をよく意識化しえているかね？（414頁）

Kちゃんよ、本当に人の心をうつ私の遍歴を小説に書きうるとするならば、それはきみの自己の死と再生の物語でなくてはならないのじゃないか？（415頁）

いま四十歳を過ぎたKちゃんが、自分の生を表に出して小説を書こうとするのはね、当然かもしれないと思うんだ。人生の旅なかばはもう後になっているんだから。さらにはヒカリさんの誕生と、その障害を克服しての成長はあるにしても、成長自体が呼びよせる困難。ヒカリさんを支えてのオユーサンとの生をいうならば、暗い森での思いということはある。それを書きあらわそうという気持は、理解できるよ、もちろんのことに……（中略）しかし、その思いに立って私を前景に押し出す小説を書く。きみの山登りの失敗を・空振りを自分は惧れるんだ。Kちゃんが自己の回心の・死と再生の物語をめざしていることはあきらかだよ。しかし、それには時がある。Kちゃんよ、きみのなかで自己の回心の・死と再生の物語を書く時は熟しているかい？（同）

このギー兄さんの批評を「僕」は「核心を射た」批評と受け止めて、この時点で書かれていた草稿をすべて焼いてしまう。実際に「僕」はこの「イーヨー」という呼び名でヒカリを登場させ、畸形をもった誕生から、中学校の特殊学級に通うまでの来歴を描いてゆく。この小説で、「押し出さざるをえない自分の内面の描き方」に「ためらつてい」という。その「根本的な課題」を指摘されたということを、物語の中で明らかにしている。その後、「ブレイクをみちびきこむこと」で、このテーマに関する「新しい物語を書くことができた」とあるが、それがこの段階で目指した「自己の死と再生の物語」であるかどうかは描かれていない。その後ギー兄さんから同様の内容の小説批評はどこにもなされていないことから、少なくともこの物語言説内においては、いまだ「僕」はこの「自己の死と再生の物語」を描きえていないものと思われる。

2 ギー兄さんのメッセージの意味

それではギー兄さんの言う、この「自己の死と再生の物語」とはいかなるものであるのか。「私の遍歴」、「私を前景に押し出す」ものとしての物語。「斯んな風に生きて来た」ことを証する一つの形。これは言い換えれば、リクルの言う「物語的自己同一性」の一つのあり方であろう。語ることによって見えてくる自分自身の証、である。もちろん語るだけならば誰でもどのような形でも可能だ。しかしギー兄さんはこの語ることによって見えてくる物語は、「本当に人の心をうつ」ものでないとならないと考えている。また「暗い森での思い」を含んだ、なかなか形にはしがたいものと考えている。ギー兄さんにとっては、どのようなものが「本当に人の心をうつ」物語として受け止められているのだろうか。

「僕」の故郷の「森のなかの谷間の村」に住むギー兄さんは、旧家の出で、幼少のころは女の子として育てられた、進駐軍のなかで対

等にふるまって英雄扱いされた「千里眼」ができるなどの数々の逸話を持つ、風変わりな人物として描かれている。「僕」と血のつながりはない。「僕」が出会ったのは10歳のときであるが、本格的なつきあいはじまったのは、「僕」の浪人時代に再会し「師匠―弟子の関係」を築くようになってからであった。大学卒業後に村へもどって働くことを考えていた「僕」が帰ってこれないように、あえて「森林組合の書記」の役を引き受け、「僕」の代わりに「森のなかの谷間の村」で生きて行く決意を固めている。

「僕」がまるで「5歳先の自分」を見ているような気持ちで接していたように、ギー兄さんは実際に「僕」の精神的な先導役となつて、ことあるごとに「僕」を数々のピンチから救ってきた。しかしその導き方はいわば、ギー兄さん自身の激しすぎる困難を代償としての、決してきれいごとでは済まされないような方法によつてであった。

(1) ギー兄さん自身の変化

「セブンティーン」事件に見舞われた「僕」に、ギー兄さんは「受け身はよくない」という中野重治の言葉から、実際に「僕」の気持ちを煽り、ピンチを救いだそうとしていたが、この「受け身はよくない」という思いは、ギー兄さん自身が大変な危険を冒した末に実感として手に入れた感覚であった。

ある日ギー兄さんは東京のデモ隊に紛れて一緒にシュプレヒコールを叫んでいたところ、運悪く右翼の暴力団に絡まれて「頭蓋をわられて」倒れてしまう。この時に「憤怒のエネルギーに支えられて」浮かんだ構想が、「受け身ではない」仕方での「新しい方向付け」であった。「ひとりの個としての自分のありかを他人に示すことをしたい」と、森のなかに「根拠地」を作るという壮大な計画である。自分の屋敷の山林を改造して「和牛の繁殖と育成」を行い、「テン窪」という一帯を牧草地にして、過疎の集落を引き寄せ小集落を作り「美しい村」とするという。実際にすぐに行動に移し、計画は実現に向けて着々と進行していた。

ところが工事も順調に進み順風満帆な空気の中、ギー兄さんがすでに関係のぎくしゃくしていたギー兄さんの恋人でもあった女性を殺して強姦殺人罪に問われるという「事件」が起くる。ギー兄さんは囚われの身となり、根拠地構想は結果的に頓挫してしまう。

そして十年間の服役を終え、ギー兄さんが「こちら側」へ戻ってきてから、「僕」は久々にギー兄さんと再会する。その姿は「本当に刑余者という感じ」がするほどの形相で、まるで「兇悪犯」そのものだった。しかしギー兄さんはその指摘も「新しい性格の反映だと思う」とそれほど腹を立てることもなく受け止めている。ギー兄さんは次のように語る。

自分はむこう側にいる間、強姦殺人者としての自分というものを、把握し直そうとつとめたからね。そういう自分を、担いなおそうとしつづけたんだよ。それというのね、なににつけ偶然が生涯を決定したと考えるのは嫌だったから。……嫌というより、むしろ怖かったのかも知れないがね。そもそも「事件」のすぐあとで、自分が首を括りそうになったのは、偶然のような出来事で生涯がダメになったと、そう思い込んだからだった。こういうふうでは、際限なく沈み込むだけだからね。むしろそれならば、自分はずっと強姦殺人を望んで生きてきて、ついにやりとげたんだと、意志的に「事件」を担いこんでさ。罪にまみれた人間として今後を考える方が、足場が確かだと感じられたのね。過去に起こったことを、なんとかごまかして、なかったことにする。その実際には不可能なことを、ジクジク後悔しながら考えてみる。こんなことも縁が切れるしね。(404頁)

「事件」がひとつの終点というのじゃなかったんだ。あれを出発点にして、十年もむこう側に閉じこめられている間、あれを考えたづけたのだからさ……(405頁)

この告白を読むと、ギー兄さんは獄中の十年間にこの「事件」について繰り返し反芻し、考え続けた結果として「罪にまみれた人間として今後を考える方が、足場が確か」と感じている。その前には「過去に起こったことを、なんとかごまかして、なかったことにする」ための方法を「ジクジク後悔しながら考えて」いたが、そのような自分とは「縁を切り、新しい着想を得たことによって、「新しい性格」を獲得しえたと述べている。このギー兄さんが自ら表現する「罪にまみれた人間として」生きて行くという気づきが、本人の「性格」までも変えることにつながっているという事実からすると、これはギー兄さんの生き方そのものに変更を迫る、かなり大きな経験だったと

考えられる。ギー兄さんの変化について、別の側面から考察してみたい。

(2) ギー兄さんの変化の意味——「自己性」に照らして

ギー兄さんが完成を目指していた「根拠地」は、先に示した通り「ひとりの個としての自分のありかを他人に示す」ことを目的としたものだった。志半ばにして自らの過ちによって計画が頓挫したまま服役していたギー兄さんは、獄中で繰り返した過去の出来事を「なかったこと」にしようと考えたという。あの「事件」さえなければ、再び自分は故郷に戻って自分の理想郷を作ることと専念できたはず。あの「事件」さえなければ…。

しかし実際問題として犯してしまった罪は消えない。自分が忘れようとしても人々の記憶には残る。どんなに醜い過去を消しゴムで消して「なかったこと」として理想を語ろうとしても、「語られない記憶」は残るのだ。何度も反芻する中でようやくそのことに気がついたギー兄さんは、それならば消せない記憶を引き出して、消せない記憶とともに生きて行こうと、そのように思う。そのことによってギー兄さん自身は救われる。

「人は語ることによって自分が何者であるかを知る」これを「物語的自己同一性 *identité narrative*」という概念で示したのは、ポール・リクールであった。自分の過去を一通り振り返ったうえで「これが自分の生きて来た証だ」と語る。これはまさに一つの「物語的自己同一性」の形であろう。その意味でギー兄さんの「根拠地」は、彼にとって「物語られた結果認識した自己の証」として一つの「物語的自己同一性」の形なのである。しかしこの「自分がそれを証だと思っているもの」の裏側には、数限りない「語られなかった自分自身」がうごめいているはずである。「物語的自己同一性は、安定した、首尾一貫した同一性ではない」(Ricoeur, 1985, 452頁)。だからこそ都合の悪いものは隠蔽し、必要なものだけを取り出すのが「物語ることによって見えてくる自分自身」なのだ。

リクールはこの相反する自己のあり方を「同一性としての自己同一性」「自己性としての自己同一性」という概念によって、区別して示している。私たちは語られる可能性のある無数の「自分とは誰か」の要素(=自己性 *ipseité*)を抱えている。それを語ることに

て一つの形にして示す（＝同一性 *mêmeté*）のが、「物語的自己同一性」の一つの形なのだ。その意味では語ることによって形をもって見えてきた自己同一性とは、あくまでも「同一性としての自己同一性」なのである。しかしながら実際に私たちは、時にその統一に亀裂を走らせるような別の要素（＝自己性）も抱えている。本来であればこの、時に矛盾するような自分自身の可能性も含めて「自分自身」というのだ。ただしこの「自己性としての自己同一性」は、そもそも無形であるため（形づいたときすでにそれは「同一性としての自己同一性」であるはずだから）、容易には見えない。そしてリクールは「自己性としての自己同一性」があらわれるのは「物語の形態の喪失、とりわけ結びの喪失」であると言う（Rieure, 1990, 192頁）。

ギー兄さんは、自分が「事件」を起こして失脚するまでは、ただ自分の「根拠地」の完成だけを目指していたが、この「根拠地」作りという「物語」が破綻したときにはじめて、自分自身の別の要素に気づいた。それは〈自分が罪を背負うのにふさわしい罪びとである〉という自覚であった。本文にははっきりとは書かれていないが、それを自覚する際に浮かんできたのは、殺してしまった恋人に対する、言葉にはしたくないようなおぞましい気持ちだったかもしれない。「根拠地」作りという理想像とはかけ離れた、エゴにまみれた自分自身の汚らしい感情だったかもしれない。いずれにせよ「罪を背負うのにふさわしい」ほどの後ろ昏い思いであっただろう。そしてそのようにして、自分が思い描いた「物語」を破綻させたときに初めて、この方が「足場が確かだ」ということに気づき、ギー兄さんは救いを見出すのである。

(3) 「物語」の破綻の先にあるもの——「自己性」の露呈として開かれた〈物語〉

翻って「僕」の問題に戻った時、このような経験を経たからこそ、ギー兄さんは「僕」が書いた「私の遍歴を描いた小説」も、「僕」にはまだその「時が熟してない」として退けたのではないか。本当に「これが私だ」を明かす物語を書くのであれば、きれいごとだけを並べて「物語」としているうちは、それは本当の「私の遍歴を描いた小説」ではない。本当に「これが私だ」を語るためには、少なくとも今、「僕」が書けなくてわだかまりを抱えている「内面の問題」を明らかにする必要がある。ギー兄さんが指摘して「僕」も否定しなかった、「自分に対して」「感じている」「根拠のない負い目」（418頁）もさらけださないとならない。だからこそ、そのようなきれいごと

の先にある感情に本気で向き合おうとせず、そのために他人から「安易なハッピーエンド」と評されてしまうような物語を書きつづけている「僕」はまだその段階ではない。理想的な「これが私の生き方です」というような「物語」が破綻した先にあるところまで描く気持ちになれたところにこそ、「自己の死と再生の物語」は存在しうるのではないか。ギー兄さんは自身の壮絶な体験を通して身をもって実感した思いとともに、そのようなことを「僕」に示そうとしたのではないだろうか。

ギー兄さんは、この「僕」との邂逅の後、計画が頓挫したまま投げ出されてあった「根拠地」の跡地を利用して、再び「自分だけの構想のモデル」(413頁)として「人造湖」建設計画を明らかにした。今度は「自分としての現実世界のモデル」として構想されたこの湖では、かつての計画にあった「美しい村」は水の底に沈み、その象徴としてあった「テン窪大櫓」の周辺が「島」となって浮かぶという設計になっている。「僕」は、ギー兄さんが再び始めたこの「この世界と・それを超えた世界へのモデル作り」(422頁)に刺激を受け、「僕」としては小説のかたちで「この世界と・それを超えた世界へのモデル作り」をしたい、「それが自分の仕事だといいたい」という考えをここで明らかにしている。

ギー兄さんが本気で始めたこの「人造湖」作りは、「根拠地」のとき以上に集落からの反対運動に見舞われ、もともと静かな「森のなかの谷間の村」は穏やかではなくなっていたが、そのような中、さらに「奇態なこと」が起る。建設現場となっている「テン窪」の土壌から、原因不明の「臭いの悪い黒い水」が滲み出たという。さらにギー兄さんの身体から「悪性の腫瘍」が発見され、地元の反対勢力によってギー兄さんが手術で外へ出ている間に工事現場に「発破を仕掛け」られ、ギー兄さんの「自分の証」としての「物語」は次から次へと「破綻」に追い込まれている。

ギー兄さん以外の者たちは、今回の「人造湖」が、前回とは何かが根本的に違うことには気づいているが、本人が語らない以上、その真相は明らかではない。たびたびダンテ『新曲』の一節に触れて自分の思いを語るギー兄さんの様子から、『神曲』に着想を得たモデルかもしれないということは読み手には伝わってくるが、それもはっきりとギー兄さんの口からは語られない。そんな中、物語の中にはギー兄さんが自分の夢を語るシーンがある。

自分の見た夢は、Paradiso そのものの夢じゃなくてね、テン雀の人造湖の夢なんだよ。水がいったまっていた、そこに小さな舟を浮かべてね。ボートならこの前から、実際に準備してあるんだ…… 夢で小舟に乗っていて、その自分の合図で、堰堤が爆破される。川下の反対派が惧れたとおりにね。そこで真黒い水ともども、自分が鉄砲水になって突き出す。その黒々としてまっすぐな線が、つまり自分の生涯の実体でね、世界じゅうのあらゆる人びとへの批評なんだよ。愛とはまさに逆の…… そう考えて、すべてを理解した感じで眼がさめた。(458頁)

少なくともこの夢を見る限り、ギー兄さんはすでに自分の証としての「物語」をきれいにまとめて収めることは考えていないことがここではっきりと見て取れる。むしろこの「物語」を破綻させたところから始まっていることがわかる。自分自身の物語の「綻び」から出てきた「黒々とし」たものが「自分の生涯の実体」であり、それが「愛とはまさに逆」のものとして「あらゆる人びとへの批評」となっている「突き出」していくのである。これこそまさに「自己性」の露呈なのではないか。ここにはリクールが「自己性としての自己同一性」という概念であらわした、「私とは誰か」すなわち「語られなかった私」の全体としての「物語」がある。「物語」が破綻したところこそ漏れ出る、「自己」の限界を越えたものとしての「物語」のあらわれなのである。

(4) 「僕」のオメデタサを自己批評したメタフィクションとしての可能性

結果としてギー兄さんは、人造湖完成間際に反対勢力の策略によって殺され、無念の死を遂げる。「僕」はギー兄さんの最期を聞き知り、想像の中でギー兄さんが女性たちによって優しく介抱され運ばれていく姿を『神曲』の「煉獄」のイメージと重ねながら、ギー兄さんに向けて長い「手紙」を書いている。最後は次のような言葉で結ばれている。

ギー兄さんよ、その懐かしい年のなかの、いつまでも循環する時に生きるわれわれへ向けて、僕は幾通も幾通も、手紙を書く。この

手紙に始まり、それがあなたのいなくなった現世で、僕が生を終りまで書きつづけてゆくはずの、これからの仕事となろう。(471頁)

書き手としての「僕」は、ギー兄さんの最期を『神曲』の美しいイメージと重ねながらこの物語をきれいにまとめて終わる。そして自分の「これからの仕事」は、「いつまでも循環する時に生きるわれわれへ向けて」の「手紙」を書きつづけることだと、ギー兄さんに宣言させている。

繰り返しになるが、「僕」は、ギー兄さんが再び始めたこの「この世界と・それを超えた世界へのモデル作り」(422頁)に刺激を受けた時に、「僕としては小説のかたちで」「この世界と・それを超えた世界へのモデル作り」をしたい、「それが自分の仕事だといいたい」と考えていた。その思いの延長として最後にこの宣言があるのだとしたら、ここまで、ギー兄さんが物語り示してきた「物語的同一性」の形と、それに対する「僕」の中途半端にも思える自己語りとの対比からこの物語を読もうとする本稿としては、異議を申し立てざるをえない。「僕」はギー兄さんから「まだ時が熟していない」と批評された時から、どこまで自分の問題に気づき、それを自身が発表する小説に還元してきたのだろうか。少なくともこの物語の中には描かれていない。

ギー兄さんは、自身の生き方をもって、本当の自己語りに必要なのは、物語が破綻するほどに、自己の「内面」を描きだし、自身の負の感情をもふくめたところから自己を見つめ直すことということ伝えていたのではなかったか。実際にギー兄さんはそれに実感として気づき、「人造湖」という新しいモデルを作り、今度は自己の限界を越えたものとしての〈物語〉が漏れ出るような、新たなモデルを「僕」の前に見せたのではなかったか。にもかかわらず「僕」はそのことに気づくこともなく、自分はギー兄さんの「人造湖」と同様の世界のモデル作りを小説執筆の形で励んでいると考えているのだとしたら、あまりに「オメデタイ」話にほかならない。

もつともこの「僕」の無知ぶりをメタフィクションとして見せることで、書き手が自身とおぼしき人物を通して自己批評したということならば話は別だ。この物語が文庫本に収録された際に、「著者から読者へ」というタイトルが冠された文章の中で、著者として的大江健三郎は、次のように述べている。

僕はこの小説を自分の生の中仕切りとしようとしたのだったと感じます。(中略) ギー兄さんという架空の人物を手がかりに自分の中仕切りまでをふりかえることになり、とくに小説家として出くわした様々な問題点を検証してゆくことになったのでした。

同じ名の冠されたこの著者をそのまま書き手として考えるならば、書き手はこのメタフィクションの執筆を通して、自己語りになんにも必要なことを、ギー兄さんという人物を通して「僕」に気づかせることで再認識したということになる。「物語」としての優劣を破綻の有無に見て、「物語」として綻びのない完結したものを優れた「物語」とする読み方では考えもつかないであろうが、一人の書き手がその思いをいやおうなく「吐露」しているからこそ、より「人間らしい」、「真に迫った」物語として読まれるという見方もあるのではないか。そのようにして、「物語」の破綻の先にあるものに目を向ける視点によって、より人の心に訴えかける〈物語〉のあり方を問うたのが、この『懐かしい年への手紙』の真価であると結論づけたい。

この著者として的大江健三郎は、この後も精力的にメタフィクションとしての物語を書き続けている。筆者としては、同じ名を冠した彼の著作を通して、ギー兄さんが身体を張って「僕」に示した、本当に必要な「自己の死と再生の物語」が書かれゆく姿を引き続き追いかけていきたいと考えている。

(参考文献) (本文引用はすべて翻訳者による)

- Ricoeur, P. (1960) *homme faillible*. Aubier (久重忠夫訳『人間この過ちやすきもの—有限性と有罪性』以文堂 1978)
- Ricoeur, P. (1983) *Temps et Recit I*, édition du Seuil (久米博訳『時間と物語Ⅰ』新曜社 1987)
- Ricoeur, P. (1985) *Temps et Recit III*, édition du Seuil (久米博訳『時間と物語Ⅲ』新曜社 1990)
- Ricoeur, P. (1988) *l'identité narrative*. *Revue internationale*, *Esprit*, Juillet-août, p.295-304
- Ricoeur, P. (1990) *Soi-même comme un autre*. édition du Seuil. (久米博訳『他者のような自己自身』法政大学出版局 1990)
- 杉村靖彦『物語と自己の探求』(『フランス哲学思想研究』第4号・日仏哲学会 1999, p.68-83)

- i リクールの「物語的自己同一性」については、拙稿(札幌大学総合論叢 第34号)の考察がある。
- ii 本稿でいうところの「物語」とは、リクールの定義に従い、「物語る」という語りの行為を内包した narrative の訳語として用いている。
- iii 初出は1987年(講談社刊)。のちに文庫本、全集に収録されている。
- iv メタフィクションの定義については Waugh, P. (1984) *Metfiction*. Methuen & Co. Ltd P. 2 ~ 4
- v 「言葉にならない思いに何度もとらわれ」ていたという解釈は、物語中に「僕」が書けなくてわだかまりを抱えている「内面の問題」を明らかにする必要があると考えていること、また「自分に対して」「感じている」「根拠のない負い目」(418頁)を感じているという言説をふまえている。